

## 露地ナス圃場の周縁部に植栽した

### フレンチマリーゴールドの天敵温存効果

井村岳男・神川諭（奈良県農業総合センター）

演者らは、奈良県の露地ナスの減農薬栽培技術を確立するため、植生管理による土着天敵相の保護・増強に取り組んでいる。2010年度の調査では、フレンチマリーゴールド（以下マリーゴールド）が、ミナミキイロアザミウマ（以下、ミナミキイロ）の天敵ヒメハナカメムシ類（以下、ハナカメ）および、広食性の天敵であるクモ類の温存植物として有望であることが判明したので報告する。

調査は奈良県内の、殺虫剤管理状況が異なる3ほ場で行った。いずれのほ場にも、周縁部にマリーゴールドを播種した植生管理区と対照区を設置した。その結果、ナスへの殺虫剤散布状況に関わらず、マリーゴールドの花ではハナカメが多発していた。また、マリーゴールドの花ではナスを加害しないコスモスアザミウマが優占しており、これがハナカメの餌となっていると考えられた。また、ミナミキイロがナスの株上で多発しているほ場でも、そのほ場周縁部のマリーゴールドにはミナミキイロはほとんど発生しなかった。このことから、マリーゴールドはハナカメを温存する一方、ミナミキイロの温床とはならず、天敵温存植物として優れていると考えられた。ナスの株上のハナカメ発生量は、植生管理区でやや増加する傾向が見られた。

一方、クモ類は、マリーゴールドの花で安定して発生が見られた。また、ナスの株上では、選択性殺虫剤を中心にした減農薬管理を行っているほ場では、植生管理区と対照区で発生量に差がなかった。しかし、非選択性殺虫剤による慣行管理を行っているほ場では、対照区での発生は抑制されたものの、植生管理区では減農薬ほ場と同程度の発生が見られた。このことから、天敵類を保護するような減農薬管理を行っているほ場では、クモ類の発生に対する植生管理の影響は小さいが、非選択性殺虫剤の恒常的な散布でクモ類が排除されているほ場では、マリーゴールドの植栽によってクモ類の発生を回復させられると考えられた。

マリーゴールドの花は播種1ヶ月後の6月中旬からナス栽培終了まで咲き続け、露地ナスの栽培期間をほぼカバーした。また、種子が安価で管理に手間がかからず、経営的にも有望と考えられた。